

白屈菜記

泉鏡花作

全一章

白屈菜採集に就ては、同人殆ど總出にて、百方涉
獵したりけれど、いづれも平生、垣根に琴の主を差
覗く風流と、晦日に落ちたるを拾ふ慾心を禁じたる
を以て、道のべの草の風情を解せず。折からの萩桔
梗こそ夜目にも知れ、草の王の實の小かなるを探り
得で、いたづらに、嫁菜の花の紫を歎ち、名さへ狐
ざゝに欺かるゝを悔ゆるのみ。中には目白臺、大塚
のあたりにて、奇效を奏したるもなきにあらねど、
近眼予の如きは蛇除けの杖に叢を分けて三日の間、
朝より夕にいたりて一莖を得ず。其三日目の暮方な
ど、あはれ、けふも又腰に莖をさゝず、手に花をか
ざゝず、暑さ如斯、師の君は臥しておはすと、茫然
として音羽護國寺の傍路より、せめてもの心やり、
月に庚申塚にや行くべきとて、遠方の森はや暗きを
たよりなくイめば、燈近き垣根に添ひて、小川流るゝ
向うより三個の人影、朦朧として出来る。ひとしく

瘦脚やせずねの尻端折しりはしより、裾すそも袂たもとも埃ほこりに染そみて、風呂敷ふうろしきを手にしたるあり、手拭てぬぐひを腰こしにつけたるあり。中なかに一際目きはめに附つきて扇持あふぎもちたる好男子かうだんし、や、と聲こゑかくれば、や、と答こたへて、薄すくきの中なかに行合ゆきあひしは、お納戸町なんどまちの風葉ふうえふなり。斯この酒さけのみの豪傑かうけつを、朦朧もうろうとしてといふよしも、黄昏たそがれのゆゑにはあらず、ひねもす、崖がけを攀よぢ川かはを渡わたり、野のを横よこぎり、板橋いたばしのさきまで行ゆきたるが、わづかに葉はの枯かれ根ねのからびたるを一束たばね、それさへ十本とには過すぎざれば、力ちからさへ氣衰きおとろへて然しかりなりけり。

されば包つづみて擔になふべかりし、風呂敷ふうろしきを草くさに敷しきて、お納戸町なんどまちが握飯にぎりめしの残りのことともに袂たもとより取出とりいだす、マツチ煙草たばこをつけあひつ、嘗かつて予大塚よおほつかに住すめりし頃ころ、君きみと此この小川をがはに大根洗だいこんあらふ女をんなを見て、其時そのときは句くを尋たづねしがと、悵然ちやうぜんたるもの久ひさしかりき。

後のち、白屈末採集はくくつさいいしふのこと、二六にろくの紙上しやうに出いづるに及およびて、我が庭にはの土手とてにあり、古里ふるさとの山やまにあり、畑はたに見みつ、野のに見みつとて、音信おとづれ一日いちにちに數十通すう、中なかには六十年そちの老人らうじんの土つちながら草くさを提ひきげて、横寺町よこでらまちを訪とはるゝあり、劇はげしき官職くわんしやくに在ある仁ひとの、小包持こづゝみもちて新報社しんぱうしやを

問はるゝありゝ其日も又藥革とりに出でたる者の風采と、携へたる標本とに仔細をさとりて、今朝の二六の記事にて知りぬ、其の草の王摘み置けりとして、懇に門を開きつゝい縁側より恵まれたる、臆たき姫もありしとかや。偏に江湖の厚意を謝して、風葉と予と一統怠慢の罪淺からざるを慙愧に堪へず。

因にいふ、採集寄贈を辱うしたる中に、よく似て非なる（チャンバン菊）と言へるが多し。こゝにいふは、其の違へるを啓すにあらず、チャンバン菊は毒あるよし、過ちて採りて用ゐたまはんことを恐れ也。又、採集者の路に白屈菜を携へたるを見給ひて、何の用にあつるやと問はれしが少からず、たゞ胃病に功ありと答へて、悉しく用法を説かざりし人もあるべし、草のまゝ煎藥として、功ありや毒ありやはいまだ定ならずと聞く、くれ／＼も素人手に、みだりに用ゐたまひそとよ。

【完】